

## 楊載の「起承転結」説 釈訓 (上)

鈴木敏雄

### 序 「三多」と学詩

元の楊載、字は仲弘(1271—1323)〈注1〉に、『詩法家数』一卷〈注2〉がある。この著はいわゆる詩話に属するが、題名からも分かるように「詩法」を論じている。とりわけその本論とも言える「起承転結」説は、従来その説の創始を問題にする際に引かれる、同じく元の四大家のひとり范梈、字は徳機の『詩学禁癩』等にくらべ、整然としているように思える。本稿では、楊載のこの「起承転結」説が、元代文学批評の一環としていかなる理念および理論を展開するものであるのか、釈訓を試みながら明らかにしてみたい。

『詩法家数』において楊載は、詩は学んではじめて作ることのできるものであることを何よりも主張する。

詩は苦思するを要す。詩の工みならざるは只だ精思せざるのみ。思はずして作らば、多しと雖も、亦た奚を以つてか為さんや。古人は苦心すること終身、日に錬り月に煨え、「語人を驚かさずんば死するも休まず」と曰はざれば、「一生の精力は詩に尽く」と曰ふ。今人未だ嘗て詩を学ばずして、往々にして便ち詩を能くすと称す。詩豈に学ばずして能くせんや。(総論)

詩は、いかに学ぶのか。楊載は、作る前にまず漢魏盛唐の詩をあたかも経書を習得するときのように読むよう主張する。

今の学ぶ者、倘し詩に志すこと有らば、須らく先づ漢魏盛唐の諸詩を將つて、日夕諷詠に沈潜し、其の詞に熟し、其の旨を究むれば、則ち又た諸もろの詩を善くするの士を訪ね、以つて之れを講明すべし。今人の経を治むるに、日に就り月に將み、而して自ら然く得る有らば、則ち之れを左右に取るも、其の源に逢ふがごとし。苟も然らずと為さば、我其の詩を能くする者を見ること鮮し。是れ猶ほ孩提の童の、未だ能く行かざる者にして行かんと欲し、仆れざるもの鮮きがごときなり。

余詩の一事に于いて用工すること二十餘年、乃ち能く諸法を会し、而して其の一、二を得。然れども盛唐の大家数に於いては、抑そも亦た未だ敢へて其の似る所有るを望まざるなり。

すなわち、漢魏盛唐詩を、

詩には三多有り。読多、記多、作多なり。(総論)

と言うように、ひたすらたくさん読み、覚え、そして同じように作ってみると言うのである。

もちろんこの「三多」の考え方は、総じて言えば最終的にそのようにすれば良いと言うのであって、具体的な詩の学び方を示したものではない。

では、具体的には漢魏盛唐詩をどのように学ぶのか。楊載はまず、その「体」に習熟する必要を説く。そしてそのために、詩の流れを考究するように言う。

詩の体は、「三百篇」流れて『楚詞』と為り、樂府と為り、「古詩十九首」と為り、蘇・李の五言と為り、建安・黄初と為る、此れ詩の祖なり。『文選』の劉琨、阮籍、潘・陸、左・郭、鮑・謝の諸詩、淵明の全集は、此れ詩の宗なり。老杜の全集は、詩の大成するものなり。(総論)

詩の流れの中では、漢魏晋宋の詩は詩の宗祖として位置づけられる。そして、集大成である盛唐の杜甫の詩が最終的に目指される。この時、そのさらに源流に殊さらに『詩経』を置く点は、後述するように、楊載の「起承転結」説において意味を持つ。楊載の説の根底には『詩経』の精神が流れており、それを継承する漢魏盛唐詩の「体」を学ぶことが提唱される。

そこで詩作に臨むことになるが、「体」を首尾一貫すべく結ぶことを第一として、以下「意」、「句」、「字」を決めるときの重要性を提唱していく。

体を結び、意を命じ、句を鍊り、字を用ふるは、此れ作る者の四事なり。体なる者は、一題を作るがごとく、須らく自ら斟酌すべし。或は「騷」、或は『選』、或は唐、或は江西、「騷」は雜ふるに『選』を以つてすべからず、『選』は雜ふるに唐を以つてすべからず、唐は雜ふるに江西を以つてすべからず。須らく首尾渾て全きを要すべく、一句は「騷」に似、一句は『選』に似たるべからず。(総論)

「意」を命ずるときに目指すのは、

意を立つるは、高古渾厚なるを要し、氣概有り、沈著を要し、卑弱淺陋なるを忌む。(作詩準繩)

である。とりわけ「高古」と「沈著」を目指すように言うのは、楊載の説の何箇所かに散見できる(注3)。

「句」を鍊るときに目指すのは、

句を鍊るは、雄偉清健にして、金石の声有るを要す。（作詩準繩）

と言うように、響きである。ついでに「韻」にも触れておけば、

韻を押すは、押韻穩健なれば、則ち一句に精神有り、柱磔の其の堅牢なるを欲するがごときなり。（作詩準繩）

と言うように、韻は「穩健」であること、およびその「穩健」が「句」に堅牢なる「精神」をもたらすことを目指すように言う。

「字」の用法については後述するが、詩が目指すべき、これら「体」の首尾一貫、詩意の「高古」、詩句の「穩健」、「精神」などは、

詩の難しと為すに十有り、曰く理を造る、曰く精神、曰く高古、曰く風流、曰く典麗、曰く質幹、曰く体裁、曰く勁健、曰く耿介、曰く凄切なり。

と言うように〈注4〉、実際は巧み難い。そこにやはり、詩は学んで初めてできると主張する理由もある。

では、その巧み難いといわれる「高古」で「沈著」なる「意」や、「穩健」なる「句」等を巧むには、さらに具体的にどのようなするのか。

詩は空を鑿ちて強ひて作るべからず、境を待ちて生ずれば自づから工みなり。或は古に感じて今を懐ひ、或は今を傷みて古を思ひ、或は事に因りて景を説き、或は物に因りて意を寄せ、一篇の中、先づ大意を立て、起こして承け転じて結び、三たび意を致せば、則ち工緻やかなり。（総論）

楊載はそこで、詩句を巧むには古今の事物についてよく思案し、その過程で意境を得、「起承転結」という方法で句中に意を持ち込んでゆくことを主張する。以下にはこの「起承転結」説が、詩を読みかつ作る理論としてどのように巧まれているのかを明らかにしてみたい。

## I 起句（破題、首聯）を造る、および「賦・比・興」と「優游不迫」

楊載は、起句そのものを「高古」、「高遠」に巧むことを主張する。そしてそのためには「闊く地歩を占む」べきであると言う。

五言と七言は、句語殊なると雖も、法律は則ち一なり。起句は尤も難し。起句は先づ須らく闊く地歩を占むべく、高遠なるを要し、苟且なるべからず。……（律詩要法）

## 七言 五言)

大抵詩の作法には八有り、曰く起句は高遠なるを要す、……曰く上下相生ず、曰く首尾相応ず、……曰く地歩を占む、蓋し首の両句先づ須らく闊く地歩を占むれば、然る後六句は本有るの泉のごとく、源々として来たるべし。地歩一たび狭ければ、譬へば猶ほ根無きの潦のごとく、立ちどころにして竭くべきなり。

「闊く地歩を占む」ことが、承句以下を平板さから救う。

では、「闊く地歩を占む」ためにはどのようにするのか。ここで楊載は『詩』の六義の「賦・比・興」の手法に拠ることを提唱する。

或は景に対して興起りし、或は比起りし、或は事を引きて起こし、或は題に就きて起こす。突兀として高遠、強風の浪を捲き、勢ひ天に滔らんと欲するがごときを要す。(起承転合 破題)

「賦・比・興」、すなわち直叙のみならず、比喩や連想に拠れば「高遠」なる境地を創出する。それは次の「五言古詩」の一則にさらに詳しい。

五言古詩は、或は興起りし、或は比起りし、或は賦起りし、須らく意を寓するは深遠、詞を託するは温厚、反復して優游、雍容として迫らざるを要すべし。或は古に感じて今を懐ひ、或は人を懐ひて己れを傷み、或は瀟洒閑適なるも、景を写すは雅淡なるを要し、人心の至情を推り、感慨の微意を写し、悲・慳は含蓄ありて傷まず、美・刺は婉曲にして露さず、「三百篇」の遺意有りて方めて是なるを要す。漢魏の古詩を觀るに、藹然として人を感動せしむるの処有り、「古詩十九首」のごとき、皆當に熟読玩味すれば、自づから其の趣きを見はすべし。(五言古詩)

無論、詠み起こしに関しては、「五言古詩」に限らず、近体か古体かにもあまり拘らなくてよい。要は、「賦・比・興」で起こすことが詩意を「深遠」にし、『詩經』の遺意でもある「優游不迫」の理念を創出する。それがさらに、

詩の六義は、実は則ち三体なり。風・雅・頌なる者は、詩の体なり。賦・比・興なる者は、詩の法なり。故に賦・比・興なる者は、又た風・雅・頌を製作する所以の者なり。凡そ詩の中には賦起り有り、比起り有り、興起り有り、然れども風の中に賦・比・興有り、雅・頌の中にも亦た賦・比・興有り、此れ詩學の正源にして、法度の準則なり。凡そ作る所有り、而して能く備さに其の義を尽くせば、則ち古人も到り難からず。直ちに其の事を賦するがごときは、優游として迫らざるの趣き、沈著痛快の功無く、首尾率直なるのみ、夫れ何ぞ取らんや。(「詩學正源」風雅頌賦比興)

とも言うように、詩の「体」を「首尾率直」にしないための要素となる（注5）。

詩の体と為すに六有り、曰く雄渾、曰く悲壯、曰く平淡、曰く蒼古、曰く沈著痛快、曰く優游として迫らず。

楊載は平板さを忌み、首尾を一貫させるための六体の一つに「優游不迫、沈著痛快」の理念を提示する。起句を「賦・比・興」で起こすことの意味の一つは、この理念を創出する態勢づくりに在る。

夫れ詩の法たるや、其の説有り。賦・比・興は、皆詩の制作の法なり。然れども賦起こり有り、比起こり有り、興起こり有り、主意は上一句に在りて、下は則ち一句を貼承し、而る後方めて其の意を発出する者有り。兩句を双起し、而して兩股を分作し、以て其の意を発する者有り。一意もて作出する者有り。前六句は俱に散緩なるがごとく、而して收拾は後兩句に在る者有り。

杜詩の法は、首聯の兩句に在ること多し。上句は領聯の主と為し、下句は頸聯の主と為す。

歴史や人事に感じて意を立て、「賦・比・興」の起こし方が決まれば、後はその比喻・連想表現によってさまざまな展開が可能になる。起句はそのようにして始めて「闊く地歩を占む」という課題を克服し、「高遠」、「深遠」の高みから詠み起こすことで、首尾一貫した「優游不迫」等の理念を創出するための態勢ができあがる。

## II 承句（領聯）を造る

前掲の詩の八作法の一つに、

大抵詩の作法には八有り、……曰く承句は穩健なるを要す、……曰く首尾相応ず、……

とあり、楊載は承句は「穩健」に作るべきであるとする。

詩は首尾相応ずるを要す。人の中間の一聯には、儘ま奇特なる有るを見ること多く、全篇湊合して、二手を出だすがごときは、便ち家数を成さず。此の一句一字は、必ず須らく意を聯合に著くべきなり。大概是沈著痛快・優游として迫らざるを要するのみ。（総論）

承句（転句）が突出した「奇特」な句（聯）になることは、やはり首尾一貫を全うできない。そこで平板、率直に陥る場合とはまた逆に忌まれることになる。「沈著痛快、優游不迫」な句となるよう「穩健」さに気を配るほかはない。

或は意を写し、或は景を写し、或は事を書し、事を用ひて証を引く。此の聯は破題に接するを要し、驪龍の珠の、抱きて脱せざるがごときを要す。（起承転合 領聯）

と言うのも同様である。「穩健」さを損なわないためにはどのようにするのか。句中に取り込まれる「意」・「景」・「事」それぞれの扱いにおいて「穩健」になる必要がある。それには、

意を写すは、意中に景を帯び、議論発明なるを要す。景を写すは、景中に意を含み、事中に景を瞰る。細密清淡なるを要し、庸腐雕巧なるを忌む。事を書するは、大にしては国事、小にしては家事、身事、心事なり。事を用ふるは、古を陳べて今を諷し、彼に因りて此れを証し、迹を著すべからず、只だ影子をして可ならしむるのみなり。死事と雖も亦た当に活用すべし。（作詩準繩）

詩を作るは正大雄壮にして、純ら国事と為るを要す。富を誇り貴を耀かせ、亡きを傷み屈するを悼みて一身なる者は、詩人の下品なり。（総論）

詩中に事を用ふるは、僻事は實用し、熟事は虚用す。理を説くは簡易なるを要し、意を説くは円活なるを要し、景を説くは微妙なるを要す。人を譏るは露はすべからず、人をして覚えざらしめよ。（総論）

詩には内外の意有り。内意は其の理を尽くさんと欲し、外意は其の象を尽くさんと欲す。内外の意、含蓄ありて方めて妙なり。（総論）

とあるように、「意」・「景」・「事」をそれぞれ目に見える象として細密に捉え、さらにその中にそれぞれに応じてまた「景」・「意」をすっきりあっさりと含ませ、あたかも影にものを語らせるように含蓄をもたせ、その上で明瞭さを失わないように造る。あるいは書き込む出来事の大・小、用いる典故の虚・実を加減して、簡易、円滑、微妙になるよう、露骨に、一身にならないよう造る。それが承句に「穩健」を生み出す。

### Ⅲ 転句（頸聯）を造る

#### 1 転句を造る

楊載の提唱する転句（頸聯）の造り方は、「意」・「景」・「事」の扱い方を見ると、基本的には承句と同じであると考えられる。

或は意を写し、景を写し、事を書し、事を用ひて証を引き、前聯の意と相応じ相避く。変化し、疾雷の山を破り、観る者の驚愕するがごときを要す。（起承転合 頸聯）

異なるのは、承句では「穩健」に造るよう要請されたのに対し、転句はむしろそれと同律にならぬよう、人を驚愕させるような「変化」が要請されている点にある。ただし、

大抵詩の作法には八有り、……曰く転摺は力を著さざるを要す、……

と言うように、無理があってはならない。「奇特」になってしまうことは、承句同様に忌まれる。「前聯の意と相応じ相避く」と言っているのがその全てを語るように、楊載が提唱する転句は承句と表裏一体の関係をなす。たとえば承句が「景」で来たら、転句は「事」で承けるようにたたみ込むことで、無理なく「変化し」、「破る」ことができる。それは決して承句と別物であるということではない。

## 2 転句と「字眼」説

転句が承句と同律にならぬよう「変化」をつけるには、たとえば承句が「景」で来たら、転句は「事」で応ずるような造り方をする。ただし、その「変化」が「奇特」であってはいけないことは、1で述べた通りである。そのためには承句と転句とが「血脈貫通し」、「相応じ」、「相停まり」、「勻しく称ふ」ようにする。

凡そ詩を作るは、氣象は其の渾厚なるを欲し、体面は其の宏闊なるを欲し、血脈は其の貫串するを欲し、風度は其の飄逸なるを欲し、音韻は其の鏗鏘なるを欲す。若し珊瑚刻して気を傷み、敷演して骨を露さば、此れ涵養の未だ至らざるなり。当に益ます以つて学ぶべし。（総論）

とあるように、「血脈は其の貫串するを欲す」は詩を学ぶときに必要な修養事項となっている。これを修得するためには、句中の一字一字をどうしても疎かにできない。

七言律は五言律よりも難し。七言の字を下すは較ば粗実にして、五言の字を下すは較ば細嫩なり。七言は若し截ちて五言を作るべくんば、便ち詩を成さず。須らく字々去らば得ざるべくして方めて是なり。所以に句は字を蔵するを要し、字は意を蔵する

を要し、聯珠の断えざるがごとくして、方めて妙なり。(七言 五言)

七言は、声響・雄渾・鏗鏘・偉健・高遠なり。五言は沈静・深遠・細嫩なり。(七言 五言)

と言うように、字の用い方に工夫を凝らし、「意」を断絶させることが無ければ、詩の首尾一貫した趣きが保てる。

楊載はそこで、承句から転句に「意」を転ずるために、「意」に「景」を帯びさせ、あるいは「景」に「意」を含める等の句造りをする際、転句(頸聯)では「実字」を用いるよう提唱する。これが楊載の「字眼」説であり、句に亮るさ健やかさをもたらす点で、「起承転結」説の重要な理論の一つとなっている。

五言と七言は、句語殊なると雖も、法律は則ち一なり。……中間の兩聯の句法は、或は四字截、或は兩字截なるも、須らく血脈貫通し、音韻相応じ、対偶相停まり、上下勻しく称ふを要すべし。兩句共に一意なる者有り、意を各おのにする者有り。若し上聯已に意を共にすれば、則ち下聯は須らく意を各おのにすべし、前聯既に状を詠めば、後聯は須らく人事を説くべし。兩聯最も同律なるを忌む。頸聯は意を転じて変化するを要し、須らく実字を下すこと多かるべし。字実なれば則ち自然にして響きは亮るく、而して句法は健やかなり。(律詩要法 七言 五言)

字を下すは、或は腰に在り、或は膝に在り、或は足に在り、最も精思するを要す、宜しく的当なるべし。(作詩準繩)

句中には字眼有るを要す。或は腰に在り、或いは膝に在り、或いは足に在り、一定の処無し。(総論)

詩句の中には字眼有り。兩眼の者は妙なるも、三眼の者は非なり。且つ二聯に連綿の字を用ふるは一般なるべからず。中腰の虚活の字も、亦た須らく迴避すべし。五言の字眼は第三に在ること多く、或は第二字、或は第四字、或は第五字なり。

字眼第三字に在り

「鼓角悲荒塞、星河落曉山。」(鼓角荒塞に悲しく、星河曉山に落つ。)

「江蓮揺白羽、天棘蔓青絲。」(江蓮白羽を揺らし、天棘青絲を蔓ぶ。)

「竹光团野色、舍影漾江流。」(竹光野色に团り、舍影江流に漾ふ。)

字眼第二字に在り

「屏開金孔雀、褥隱繡芙蓉。」(屏は開く金孔雀、褥は隠す繡芙蓉。)

「碧知湖外草、紅見海東雲。」(碧にして知る湖外の草、紅くして見ゆる海東の雲。)

「坐対賢人酒、門聴長者車。」(坐して対す賢人の酒、門に聴く長者の車。)

字眼第五字に在り



「兩行秦樹直、万点蜀山尖。」（兩行秦樹直く、万点蜀山尖し。）

「香霧雲鬢濕、清輝玉臂寒。」（香霧雲鬢濕り、清輝玉臂寒し。）

「市橋官柳細、江路野梅香。」（市橋官柳細く、江路野梅香し。）

字眼第二・五字に在り

「地坼江帆隱、天清木葉聞。」（地坼けて江帆隱れ、天清くして木葉聞こゆ。）

「野潤烟光薄、沙暄日色遲。」（野潤ひて烟光薄く、沙暄くして日色遅し。）

「楚設関河險、吳呑水府寛。」（楚は関河の險しきを設け、吳は水府の寛きを呑む。）

詩は字を鍊るを要す。字とは眼なり。老杜の詩のごとき、「飛星過水白、落月動檐虛。」（飛星水に過ぎりて白く、落月檐を動かして虚し。）は中間の一字を鍊る。「地坼江帆隱、天清木葉聞。」（地坼けて江帆隱れ、天清くして木葉聞こゆ。）は最後の一字を鍊る。「紅入桃花嫩、青歸柳葉新。」（紅は桃花に入りて嫩やかに、青は柳葉に歸して新たなり。）は第二字を鍊る。「歸」・「入」の字を鍊るに非ざれば、則ち是れ兒童の詩なり。又た「暝色赴春愁」（暝色は春愁に赴く）と曰ひ、又た「無因覺往來」（往來を覺ゆるに因る無し）と曰ふは、「赴」・「覺」の字を鍊るに非ざれば、便ち是れ俗詩なり。劉滄の詩に云ふがごとき、「香消南国美人尽、怨入東風芳草多。」（香りは南国に消えて美人尽き、怨みは東風に入りて芳草多し。）は是れ「消」・「入」の字を鍊る。「殘柳宮前空露葉、夕陽川上浩烟波。」（殘柳の宮前露葉空しく、夕陽の川上烟波浩し。）は是れ「空」・「浩」の二字を鍊り、是れ最も妙処なり。（総論）

ここに挙げられた句例を見ると、「字眼」は實際は転句（頸聯）だけでなく、承句（頷聯）にも相半ばして置かれていることが分かる。まさしく承句と転句が表裏一体の関係にあることを物語っていると言えるが、ここで注目すべきは、「字眼」になる字が句の腰・膝・足すなわち第何字目に在っても、全てが用言である点に在る。これが転句に亮るさ健やかさという趣きをもたらす。逆に、「字眼」の練り方が充分でなければ「兒童の詩」、「俗詩」になる。「俗詩」とは、

詩の忌むに四有り、曰く俗意、曰く俗字、曰く俗語、曰く俗韻。

とある四忌（注6）を犯すものであろうが、「意」を転ずる際に亮るさ健やかさを保ち「俗」に陥らないためには、用言の「実字」が有効であるとする理論を、楊載は提示している。

「俗詩」にならないためには、「意」を立て、「字」を用いるなどの際に、

人の多く言ふ所は、我之れを言ふこと寡し。人の言ひ難き所は、我之れを言ふこと

易し。則ち自づから俗ならず。(総論)

と言うようにする。転(承)句では他人の使わない「実字」を用言に用いること、それが「字眼」となり、詩句に「奇特」にならない「変化」をもたらす。

#### IV 結句(尾聯)を造る

「起承転結」の句造りでは、結句がもっとも難しいと楊載は言う。

詩は結尤も難し。結句を好くする無くんば、其の人の終に成る無きを見るべし。(総論)

その難しさは、

大抵詩の作法には八有り、……曰く結句は迹を著さざるを要す、……

と言うように、まず詩を結ぶに当たって「迹を著さず」という点に在る。これは主として「事(典故)」を用いる際の注意事項であろうが、「一步を開き」、「散場を作り」、「生意を運らし」というのも同様、散り際を程よくつくり、頃合いよく退くことが「言に尽くる有りて意に窮まる無し」を妨げないための布石となるとして、重視される。

或は題に就きて結び、或は一步を開き、或は前聯の意を織ひ、或は事を用ひ、必ず一句を放つて散場を作り、剡溪の棹の、自づから去り自づから回るがごとく、言に尽くる有りて意に窮まる無し。(起承転合 結句)

五言と七言は、句語殊なると雖も、法律は則ち一なり。……其れ尾聯は能く一步を開き、別に生意を運らして之れを結ぶべし、然れども亦た起の意に合する者有るは、亦た妙なり。(律詩要法 七言 五言)

晋の王徽之が興に乗じて剡溪の風流人である戴逵の家に向かい、門前まで行き着いたところで興が尽きたと言って会わずに還ってきたという故事がある(注7)。そのように「言に尽くる有りて意に窮まる無し」で結ぶことができれば、

語は含蓄を貴ぶ。「言に尽くる有りて意に窮まる無し」は、天下の至言なり。「清廟」の瑟のごとく、一倡三歎、而して遺音有る者なり。(総論)

と言うように、「起承転結」説の達成理念の一つである「含蓄」が、最終的に得られるこ

とになる。

以上、楊載の「起承転結」説の基本理論を概観してみると、その根底に『詩經』の「優游」たる精神を理念として継承するための「賦・比・興」の方法化、詩句の「穩健」化、承句と転句の表裏一体化、その際に首尾一貫した「変化」をつけるために用言を俗でない「実字」を用いる「字眼」説の導入、および「起承転結」説の達成目標としての「含蓄」説が、詩句を巧む理論として歴然と横たわっていることが知られる。楊載の「起承転結」説は、概して万事過ぎたるを嫌い、温厚を目指したものであるといえる。それはやがて楊載の詩作の実践と併せて検証する必要があるが、以下に結論として述べなければならないが、紙幅の都合で次号にまわしたい。

次号では、

結論 スタイルごと、テーマごとの「起承転結」

附論 古詩における「鋪叙」

の二点について述べたい。

〈注〉

- 1 『元史』卷一九〇「儒学傳」に伝があり、著に『楊仲弘集』八卷等がある。
- 2 『歴代詩話』所収。
- 3 「優游不迫、沈着痛快」は『滄浪詩話』詩弁の理念の一つであること、言うまでもない。なお、『滄浪詩話』からの影響等に関しては、朱栄智『元代文学批評之研究』（'82台湾・聯経出版社）に詳しい。
- 4 『滄浪詩話』詩弁「詩の品に九有り」等の説を承ける。
- 5 「優游」は、『詩』大雅・卷阿の「伴奭爾游矣、優游爾休矣」、小雅・白駒の「慎爾優游、勉爾遁思」、『禮記』儒行の「忠信之美、優游之法」、『楚辭』九章・昔往日の「報大徳之優游」、『史記』孔子世家の「優哉游哉、維以卒歳」の理念を体する。「沈著痛快」は、例えば劉宋の羊欣『采古来能書人名』に「呉人皇象能草、世称沈著痛快」とあり、早くは書法の評語などに見える。
- 6 『滄浪詩話』詩法「五俗」の説を承ける。
- 7 『世説新語』任誕篇。